

下野國誌

十一

				和書門
一	八	八	八	
二	四	五	五	
冊	架	函	號	類

庫	文	閣	内	
七	八	八	八	和
四	一	五	五	書
函	冊	號	類	

内閣文庫	
番號	和 8852
冊數	12 (11)
函號	174 229



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

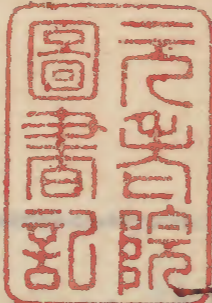
Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり
糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり



下野國誌十一之卷

芳賀百姓越智直守弘識

古城盛衰

小山城



都賀郡小山驛小あて往還筋の西乃方より思川の東岸より下野大掾政光よりめく築く保元平治の年間より

小山系圖

大織冠鎌足公五代嫡孫

正二位左大臣魚名公五男

○藤成

從四位下下野大从伊勢守大宰大貳母津守氏女

下野國誌上

豊澤

後四位上下野大炊備前守母下野史生鳥取業俊女一本作下野權守

村雄

後五位上下野大炊長門守母下野史生鳥取豊俊女一本作下野大掾河内守

秀郷

後四位下野大炊武藏守母常陸掾鹿島女天慶三年庚子四月廿五日任鎮守府將軍世稱田原藤太天曆十年丙辰四月廿日卒号東明寺殿

系譜一本小承平二年壬辰十月廿日到近江國勢多依龍神憑入龍宮城其寇射殺三上山蜈蚣而自龍神得十種之神寶云云是、少、唐土此小説、唐の敬宗皇帝の寶歷年中に蔣武と云弓の達人あり、一日狸々来て云吾友は白象あり、其類族悉く巴蛇の為害せらる、類々公彼巴蛇を退治して白象を助け給へ云、蔣武諾して狸々を伴ひ行其所に至り巴蛇を射殺し、數多の象牙を得、資財を、と、と、と、附會して巴蛇を蜈蚣に替へ、白象を龍神小比、と、ものなると、或人より、と、あ、と、巴蛇の説、と、信、と、ま、以、猶、龍、神、の、と、論、と、と、と、と、と、

藤原秀郷朝臣之像

号儀五百道權現云々

近江國勢多

雲住寺安置



乃門と米々みりり

村々終をぬ

藤太イ

と、の、り、と、と、あ、て

保元物語、此歌、八、藤、六、左、近、と、云、者、の、と、あ、と、と、と、と、と、

下野國誌上

安藝郡佐野莊吉水村小朝臣の廟ありいと大なる塚の上よ小祠あり田原八幡と崇め祭まり

巴蛇食象之圖



山海經曰巴蛇食象三歲而出其骨君子服之無心腹之疾

楚詞曰有蛇吞象厥大何如說者云長千尋其為蛇青黃赤

千晴

從五位下相摸从鎮守府將軍奧州秀衡及蒲生寺之祖

千常

從四位下野守母源侍從通定女天祿元年庚午正月十五日任鎮守府將軍一本作美作守左衛門尉

千方

從四位下野押領使陸奧守天元二年己卯正月廿日任鎮守府將軍一本作智方

文脩

從五位下野押領使内舍人頭永延三年己丑正月十日任鎮守府將軍一本作文脩又公脩

文行

從五位下左衛門佐母鎮守府將軍藤原利仁女任左衛門佐故子孫号佐藤又近藤武藤後藤尾藤首藤小野寺等之祖別在系

兼光

從五位下野大从阿波守母同上長德四年戊戌正月十五日任鎮守府將軍

兼行 從五位下 淵名大夫 足利佐野阿曾治等之祖 別在系

賴行 從五位下 下野大炊安房守 左近將監治安三年壬戌正月廿九日任鎮守府將軍 一本下野守

武行 太田壹岐守判官改行範

女子 相摸守公光室公清母

行高 下野大炊太田權頭實武行 男叔父賴行無嗣子故家督 宗行 下野大炊太田大夫

行政 下野大炊太田次郎大夫 行光 下野大炊太田四郎

永承六年辛卯六月七日後于源賴義朝臣而下尚奥州云 大瀉五郎又大方後作大實常陸國住人

政平 関次郎住大寶関館大寶関寺之祖

辨覺 日光座主中興開基号光明院任大僧正

行廣 太田太郎母秋田又太郎重 網女 行朝 太田權頭号小權頭太田梁田寺之祖

行方 大川戸下總權守三郎母同上大川戸清久高柳等之祖

行政光 從五位下 下野大掾小山小郎法名蓮西所領九万餘町云母同上

行義 下河邊庄司五郎治承四年合戰後源三位賴政卿而賴政卿討死之刻携其首級歸古郷葬之云今有其墓矣下河邊川候幸島平方寺之祖

女子 那須太郎資隆室森田太郎光隆母

下河邊と云今の古河駅より小山神鳥谷西森寺開山光佛房より下河邊行義の二男なりと云

下野國誌上

賴經

吉見三郎初名朝信武藏國住人吉見太郎源賴茂家督母賴茂女

朝政

下野守從五位下小山左衛門尉判官小四郎母宇都宮下野權守藤原宗綱女法名生西嘉禎四年戊戌三月晦日卒八十四

宗政

從五位下淡路守長沼五郎左衛門尉母同朝政長沼皆川等之祖別在系

朝光

上野公從五位下結城七郎左衛門尉母同上初名宗朝下總國住人

東鑑治承四年十月二日卒巳今日武衛御乳母故八田武者所宗綱息女
小山下野大掾政光妻号寒川屋相具鍾愛末子參高隅田宿則名御前令
談往事給以彼子息可令致昵近奉公之由望申仍召出之自加首服給取御
烏帽子授之給號小山七郎宗朝後改朝光今年十四歲也云
同五年閏二月廿日丙寅武衛伯父志田三郎先生義廣忘骨肉之好出常陸
國到下野國小山四郎朝政在下野國雖不被仰遣定勳功欵之由令恃
其武勇給依之朝政之弟五郎宗政并從父兄弟關次郎政平等為成合力
各今日發向小野國同廿三日朝政出本宅令引籠于野木宮義廣到于彼

官前之時朝政廻計義而令人昇登々呂木沢地獄谷等林之梢令造時聲
義廣周章迷惑之處朝政郎從太田管五永代六次和田次郎池次郎蔭澤
次郎并七郎朝光郎等保志黑三郎等攻戰朝政時年廿五朝光年十五云
宗政年廿自鎌倉向小山義廣乳母子多和山七太射取彼朝政曩祖
秀鄉朝臣天慶年中追討朝敵平將門兼任武藏下野兩國守令叙從四
位下以降傳勳功之跡久護當國為門葉棟梁也云
建久三年九月十日卒巳小山左衛門尉朝政先年募勳功浴恩沢常陸國
村田下庄也而今日賜政所下文其狀曰

將軍家政所下

常陸國村田下庄。下妻宮寺

補任地頭職事

左衛門尉藤原朝政

右去壽永二年三郎先生義廣發謀叛企圖亂爰朝政偏仰朝威
獨欲相御即待真官軍同年二月廿三日於下野國野木宮邊合戰之
刺抽軍功畢仍彼時所補任地頭職也庄官宜承知不可違失之狀

下野國誌上

所仰如件以下

建久三年九月十二日

案主藤井
知家事中原

令民部少丞藤原

別當前因幡守中原朝臣

下總守源朝臣

こゝに案主藤井とあり、俊長、知家事中原、光家、民部少丞藤原、行政、
て前因幡守中原朝臣、廣元、下總守源朝臣、邦業なり、さて此状、壽
永二年とあり、非、治承五年なり、傳寫の誤、とあり、

朝長

後五位下野權守新
左衛門尉又四郎

長村

出羽守後五位下五郎左衛門
尉判官母中條宗長女
後五位下左衛門尉領河内
郡藥師寺郷別在系

朝村

東鑑、建長二年庚戌二月廿八日の条、下野大炊職者伊勢守藤成朝臣以
来至小山出羽前司長村十六代相傳、云々あり、

時長

後五位下野大掾五郎左衛門尉

時朝

修理大夫領同郡藤井郷、

宗朝

藤井出羽守藤井大橋野口等
之祖

宗光

七郎左衛門尉領同郡塚
崎田間西郷

宗貞

塚田七郎左衛門尉

女子

相摸三郎時利室時利、北条時頼長男後改時輔在六波羅依逐心被討
赤橋義宗

東鑑、正嘉二年四月廿五日相摸三郎時利嫁小山出羽前司長村娘とあり、

宗長

後五位下五郎左衛門尉母、
宇都宮下野守泰綱女

貞朝

下野守後五位下四郎左衛門
尉鎌倉評定眾

下野國誌上

秀朝

判官建武二年乙亥七月三日
於武藏國府中討死

朝氏

小四郎

氏政

從五位下下野大掾

義政

從五位下下野大掾法名永賢
永德二年壬戌四月生害

隆政

惡四郎若大丸應永四年丁丑正月十五日於奥州會津討死

太平記よ、小山出羽入道同判官秀朝元私の、千破矢の寄手の中
小丸の、其後秀朝ハ武藏國ヲ相摸次郎時行と戦く討死
よ、秀朝以來若大丸を、官方不屬して變せざる、當國ハ小山の、
續太平記よ、康曆二年小山下野大掾義政と、宇都宮左馬頭基綱と戦て、
基綱討る鎌倉の左兵衛督氏満私の意趣よ、合戦よ及び、事を外見て、
小山義政を誅ん、云、
南朝紀傳よ、康曆二年庚申五月野州蒙原よ於く、小山下野守義政と、宇
都宮左馬頭基綱と、私よ合戦して、基綱討る、同三年辛酉鎌倉の左兵衛

督氏満進發して、小山を攻る、同年改元有く、永徳元年七月廿四日、小山退
治して、上杉安房守憲方鎌倉を立く、小山向く、氏満ハ武藏國の府中不
出張して、高安寺の陣を取る、義政戦ハ勞れ、九月十九日降参り、則出家
して、法名を永賢と云、上杉安房守よ、謁然、然れども、氏満の陣所へ参り、
同二年壬戌四月義政誅せらる、云、同至徳三年丙寅六月廿六日、關東の官方
小山若大丸義政子、下総國古河の縣よ蜂起、鎌倉より野田上野女馳向て討
死、應永二年乙亥正月、小山若大丸退治して、鎌倉の氏満古河の縣よ
向く、二月廿日若大丸敗軍して、奥州よ赴く、云、と、
櫻雲記よ、元中三年北京至徳三年六月廿六日、小山若大丸義政子、下総國古河邊ニ屯ス、
鎌倉管領氏満大軍ヲ發シ古河ニ至テ鬪フ、鎌倉勢敗ス、野田上野今戰死
ス、上杉兵庫助憲孝憲方子、後陣ヨリ兵ヲ進メ突テ掛ル、小山カ備乱シテ退散
ノ常陸へ走ル、元中四年北京嘉慶元年、小山常州完戸男躰、城ニ楯籠ル、上杉朝宗入
道禪助土月廿四日發向ノ攻戦フ、同五年七月没落、應永二年六月奥州ニ走ル、
村庄司則義、小田五郎藤綱等、一味ノ防戦ス、終ニ敗ク、同四年正月十五日、若
大丸同國會津ニ至テ、戰勞シテ自害ス、同廿四日、其子二人七歳ニ五歳、芦名
左京大夫直盛、是ヲ生捕、鎌倉ニ倡行、則六面ノ濱ニ沈メラル、云、と、
あり、

男体の城ハ
完戸の西の方
あり、愛宕山
の北、古城跡
あり

下野國誌上

續太平記、小山義政が藤子赤房元乳母に助られ奥州田村に成長し、
 小山悪四郎隆政と名乗り叛逆を企て、終に打負て應永六年、
 蝦夷に渡り、忽敷世と云者の智に成て、荒人神と崇め祀らるるを記
 上杉右衛門佐氏憲の下知として、小山新左衛門尉泰朝、結城中務允
 満廣、長沼若狹守政連、宇都宮寺一万餘騎して攻戦と記し、是に於
 て小山の正脉、断絶して、結城新左衛門尉泰朝、小山の家名を相續せり、

重興小山系圖

小山下野大掾政光四男

結城朝光八代彈正少弼基光三男

○泰朝

小山下野守新左衛門尉法名号聖安寺

廣朝

大膳大夫左馬助改名滿泰

氏朝

結城中務大輔叔父滿廣家督嘉吉元年辛酉四月十六日於結城討
 死年四十四法名圓通院勝山明永

持政

左馬助

良郷

大石彈正近江國栗田
 郡大石住人

氏郷

小四郎

女子

宇都宮下野守等綱室
 明綱母

成長

判官一本作重長實山川景胤男法名大中存孝

山川系圖、結城氏朝弟山川三郎基義三男景胤男とあり、然るに成長
 の實祖父基義、小山泰朝の三男なり、

政長

右京大夫七郎初政昭法名大雄存悅

高朝

下野守入道運久實結城政朝二男天正二年甲戌三月晦日卒六十七法名天翁孝運

女子

石川弥太郎源時通室小十郎朝成母

秀綱

小山彈正少弼小四郎初名氏朝又氏秀法名孝山

重朝

富岡主税助上野國富岡對馬守宗朝家督

晴朝

結城左衛門督赫父左近將監政勝家督

結城系圖小氏朝の末弟小富岡八郎久朝あり然るは是も小山泰朝の末子なり

政種

下野守初名朝宗母成田下総守藤原氏長女幼名伊勢千代九

秀廣

小山小四郎母北条左京大夫平氏政女

女子

那須左京大夫資景室資重母

高綱

榎本美濃守領同郡榎本郷

女子

那須修理大夫藤原資晴室資景母

秀常

小四郎

安勝

刑部

秀勝

小四郎仕氷戸家

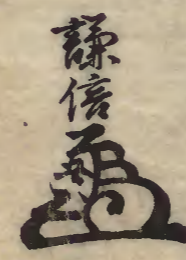
東國擾乱記弘治四年戊午二月廿八日改元有て永祿と号以今年奥州會津の芦名左京大夫盛氏越後の上杉輝虎入道謙信方へ東國出陣の義を勧めし謙信も兼て其催し有る故赤井福岡等を先陣として下野小發向し去る小山七郎政昭が祇園の城を攻る當家の田原藤太秀郷の嫡流として東國第一の名家なり近年威勢を失ひ宇都宮小田等小領地をせむるに漸く結城の庇蔭を受く社稷を保ち今七郎幼稚といひ殊に病身なり依て結城左衛

門督政勝の弟高朝天文年中より小山に移りて陣代を勤め家事軍務を執り行く下野守に任じたるが戦い及び旗を捲て降参り云々
上杉謙信法印贈山川晴重状
下総國飯沼恩名里長山川五郎左衛門所藏

然るに父ト重信の仍石倉地今月ニ有る居ありて是より地平
ホトト破布信重の事ありて同もの事ありて是より地原橋納の事
之より去る事ありて常野の事ありて是より進路中及之より父宅
延信と云ふ事ありて是より張石倉の事ありて是より利根河守の事ありて是より
日好々々の事ありて是より付先龍光の事ありて是より網走北令足
除くは及之より國守味方中は合心國守に別ありて是より折赤守
之より居居義重、恩光、是より是より深ら云々也恩光、是より虎
ら云々也恩光、是より是より是より是より是より是より是より是より
はと云々也

壬午月了

山川後記



同元龜三年壬申閏正月中旬相摸の北条氏政が下知りて秩父新六郎
氏邦、太田十郎氏房、松田左馬助、定重等、武藏相摸の軍勢を駆催し、
下野小發向し、小山、彈正少弐、秀綱が祇園の城、小押寄せ攻め、譜代の旗下
妹尾三河守、岩上伊勢守、細井左京、大橋三次郎、其外清水、高橋、黒川、青木、
塚原、上原、山中、中等、身命と惜まらん防ぎ戦ひを故小寄手引退く云々、
其後氏政の女と男政種小娘と和睦とのひ々れ、北條家小属りたり、
然るに天正十年小田原没落の後、豊臣殿下へ降参りて義と再應願ひをせり、
遂小許容あり、同年七月七日没収せられ、宰浪の身となり、武藏の就萬宮小
潜居し、浦生飛弾守氏郷、奥州會津へ入部の刺先祖同根の因縁
以て千石の知行を宛行ひ、成田下総守氏長が聲多れ、成田とも小奥州中
山の城を守らせり、此時小山家重代の旗幕等を浦生小讓りたり、浦生も
秀郷朝臣の末葉をれども、紋は翔鶴、小松皮美なり、此時より二頭左巴に改
めり云々、是より浦生家断絶の後、水戸家は仕へり、子孫連綿し、秀
綱の弟某、古河公方義氏朝臣に昵近せり、其後孫は古河の城下ありて
小山、観音寺と号し、喜連川家も、其一族連綿し、大久保加賀守殿
の家臣小も、小山、左右次郎と云人あり、御直参し、小山、新三郎

下野國誌上

と云人あり、一橋御殿の附衆より、小山泰藏と云人あり、浅野内匠頭殿の忠臣大石内藏助も、小山廣朝の二男彈正良郷の後孫なり、榎本美濃守高綱が末孫、今武州多磨郡に残りてありと云、又御直参より榎本林右衛門と云人あり、近世俳諧の發句小名と得る、其角も榎本氏あり、

長沼城

芳賀郡長沼郷太田村にあり、長沼五郎左衛門尉宗政より築く、元暦元年甲辰とあり、

長沼系圖

小山下野大掾政光三男

○宗政

後五位上淡路守五郎左衛門尉法名生蓮母、宇都宮下野權守藤原宗綱女延應二年庚子卒八十歳、所領九千餘町云々

宗政が武勇、東鑑に往々見えたり、元暦元年二月五日、谷合戦の刺と、蒲冠者範頼に属して出陣せり、

建暦三年癸酉九月十九日丙辰未刻日光山別當法眼辨覺進使者申テ云、故畠山次郎重忠末子大夫阿闍梨重慶篁居、當山麓根聚、罕人企謀、叛之由申之、長沼五郎宗政侯當坐之間、可生虜重慶之趣被仰合之、同廿六日癸亥天晴、宗政自下野國斬重慶首持参之由申之、將軍家仰曰、重忠本無過而蒙誅、其末子法師縱雖插、隱謀有伺事、我先令生虜其身、就犯否、左右可有沙汰之處、加戮誅楚、忽之議為罪業之蒙、御氣色而宗政怒眼云、於件法師者、叛逆之企無其疑、又生虜條、雖在掌内、直令具参者、就諸女性比丘尼等申状、定有宥免、沙汰之由、兼以推量之間、如斯加誅罰者也、於向後者、誰輩可抽忠節乎、是將軍家御不可也、凡右大將家御時、可厚恩賞之趣、頻以雖有嚴命、宗政不諾、申只望給御引目於海道十五箇國中、可亂行民間、無禮之由、令啓之間、被重武備之故、忝給一御引目、于今為蓬屋重寶、當代以歌鞠為業、武藝似廢、以女性為宗、勇士如無之、又没収之地者、不被充勲功之族、多以賜青女等、所謂搦谷四郎重朝遺跡、給五條局、以中山四郎重政跡、賜下総局、此外過言不可勝計、云而退出と記し、宗政此時五十二歳なり、其強直、非一知、一將軍家とあり、右大將實朝公あり、まゝ日光山の入口石屋町の上、龍藏寺と云古寺、是重

下野國誌十一

宗親

駿河權守亦四郎法名道覺永德三年癸亥三月六日府一代之合戰六十二度終無敗軍

宗明

五郎左衛門尉一本作宗章在鎌倉住于左兵衛督基氏也後孫長治吉兵衛朝之住于松平隱州候

宗明宗朝政高兼宗宗盈宗信政之朝之小至て八代たけ代々藤五郎と称以

宗恒

駿河守亦四郎法名覺歸為祖父宗光入道於長沼郷建立于宗光寺号新御堂山宗光入道依往居鎌倉新御堂也

宗干

駿河守藤四郎法名一露覺無

宗仲

亦四郎

光能

亦四郎改政連

持晴

左近將監法名号三密院

秀政

壹岐守法名寂岩覺明

朝重

駿河守初名泰重文明三年辛卯五月五日從古河公方成氏於古河討死六十二歳法名順譽覺道

重晴

富田十郎都賀郡富田住人

館林盛衰記小都賀郡藤岡城小富田又十郎とあり此後孫也

重政

亦四郎

宗秀

五郎左衛門尉

宗延

駿河守一本作宗近仕古河公方晴氏

宗隆

主税助

宗賢

肥前守

宗廣

遠江守天正六年庚寅四月九日於赤田原討死

政忠

筑前守改石川

持宗

光廣

治部大輔藤五郎法名号乘雲院輝德總覺永享十年戊午十月八日鎌倉持氏父子亡命東八箇國大名十三人連判之内也数度有武功云々

宮内左衛門尉嘉吉元年辛酉月結城攻之先陣有武功云々

瑞鳳

相國寺長老周鳳法嗣

成宗

讚岐守亦四郎文明八年丙申六月朔日卒法名号大英院雄心智存自宗光代至當代而六代兼領長沼宮森二莊四千三百貫文也且利成氏君元服之時勤理髮役云々

政常

亦四郎

宗純

新四郎早世

宗春

讚岐守亦四郎天文十年壬寅閏三月七日卒法名号信教院諦觀智光仕于芦名遠江守平盛詮

和光

掃部助

光寬

主稅助再往舊領宮森天正四年丙子十月十日没法名号本正院義山道高

光隆

因幡仕備後福山侯

太平記小長沼四郎左衛門入道、長沼駿河守宗恒等往々々々、續太平記小長沼駿河入道同治部大輔持宗等、十二代長沼の城主沼家、初祖淡路守宗政より讚岐守成宗に至りて、彼家の被官となり、鎌倉公方依りて長沼の一族も残り、退轉し其孫讚岐守宗春、奥州會津の芦名遠江守盛詮より、彼家の被官となり、天文十年壬寅閏三月七日卒、其男光隆光寬の兄弟、芦名家没落の後、再び舊領宮森小立歸り、明戸と云所小潛居せしが、光隆阿部伊勢守殿へ名出され、備後國福山に移り、其後孫森戸金七郎と号し、今連綿して、森戸と氏を改め、宮森の明戸小住なる故ありと

云光寛、菅森小留り、其後孫、民間小下りあり、其隣郷朽木駅小
 も大橋養彦と云醫師あり、是も光寛が末孫とて、系譜の古文書と藏せり、
 長沼五郎左衛門尉宗明、後孫、松平隱岐守殿、勤仕して、長沼吉兵衛朝之
 と云、毎歳長沼宗光寺へ香花料百疋、寄贈し、あり、改選系圖、卷六、
 長沼吉兵衛朝之知行二千五百石、後剃髮号閑齋、慶長十八年癸丑三月廿五日
 卒九十歳、其女と通と称ひ、長沢松平上野公殿の老臣小野能登守の養女
 とかり、依て小野於通と云、池田家の長臣塩川志摩守に嫁して、女子一人
 と生む、後離別し、女子と連て、後光明院の女御新上東門院に奉仕し、
 門院崩し給ひ、後、豊臣秀頼公の御簾中の御女添とあり、其後
 東福門院に奉仕して、金二百兩と百人扶持とを給ふ、門院御慰の為
 小浄瑠璃姫の事と十二段は作せて奉る云、其娘も才女少く、真田河
 内守信吉小愛せられ、真田勘解由と生む、通女も老後、信濃國
 一迎られ、赴く刻、よ歌小
 焼指の山より、あとききて車之、いりりあつと、いりり
 さて長沼氏、清水御殿の附衆、小長沼宗次郎と云あり、仙臺の家士小長沼
 土佐と云あり、石川中務少輔殿の臣下り、長沼好藏あり、

皆川城

都賀郡皆川村より皆川四郎左衛門尉宗負よりめく築く、寛喜
 年間あり、

皆川系圖

長沼淡路守宗政嫡孫

○宗 負 皆川四郎左衛門尉

宗 長 四郎左衛門尉

宗 景 三河守後五位下

宗 村 淡路守

宗 俊 亦四郎法名宗覺

秀 俊 八郎

宗 則 亦四郎

下野國主

宗常

亦四郎法名通覺元亨三年癸亥二月留生害

皆川四郎左衛門尉宗貞より、亦四郎宗常に至り六代相續し、倉の執權北条相模守高時より背き、元亨三年二月四日宗常生害し、所領没収せられ、断絶不及、其後百餘年を経、嘉吉の頃同姓長沼越前守秀行が後孫淡路守秀宗此より移住し、再び皆川と名乗る子孫繁昌せり。

重興皆川系圖

長沼淡路守宗政嫡孫

式部大輔宗泰男

○秀行

後五位下越前權守判官下総國府田井住人

宗秀

淡路守新左衛門尉正和三年甲寅七月移奥州岩瀬

宗行

後五位下淡路守一本作宗千駿河守

秀直

後五位下淡路守

一本に宗千駿河守と記し、非なり、宗千、長沼系圖にして時代違へり。

義秀

後五位下淡路守

満秀

藤五郎早世

憲秀

後五位下淡路守貞治二年癸卯十月移會津田島

秀光

紀伊守後五位下嘉吉元年辛酉三月於皆川卒九十六

秀宗

後五位下淡路守永享十年戊午八月朔日於鎌倉生害

氏秀

後五位下淡路守領皆川庄五十餘郷文明十二年庚子九月卒法名龍勝明川

智光

太平山坊中光泉坊初名中納言

氏神春日大明神も、城山の東方小勸請して、東宮大明神と祝祭せり、

宗成

官内少輔始号皆川大永三癸未十月三日於都賀郡川原田與宇都宮忠綱合戦而討死法名心月院禅性宗成今其地曰合戦場云々

下野國誌上

成明

長治次郎與舎兄宗成共討死法名安翁明泰

成忠

富田左衛門尉

忠宗

富田駿河守

成勝

皆川山城守天文廿辛卯二月廿六日卒八十五法名皆川院建幢成勝

宗基

長治大隅守續母方苗字号齋藤

秀隆

齋藤左衛門天正十六戊子三月十日於栗野與佐野合戰討死

俊宗

皆川山城守天正元癸酉九月十日於下総國府田井討死四十九法名心鉄院傑岑文勝

廣勝

長治彈正少弼廿九歳卒法名壽山良勝

宣英

太平山別當般若寺住持中興土世元和八年壬戌五月二日寂

廣照

後四位下山城守入道賢捨元和九年丙辰薨居同九年癸亥十二月男隆庸於常陸國府中賜万石寬永四年丁卯三月廿日卒八十法名三清院善翁慶勝

俊勝

伊豆守平右衛門尉初木城代小山御陣之節賜五百石子孫在京都

隆庸

後五位下志摩守後山城守正保二年乙酉二月五日卒五十于時大坂在番法名二陽院春岩紹知

成郷

又三郎正保二年乙酉六月四日卒廿二法名遍涼院南室紹清

慶隆

左京依舎兄早世家督賜五千石子孫代々任山城守

東國擾乱記、長治五郎宗政四代の孫越前權守秀行、下総の國府の田井に住依、田井判官と云、其嫡男淡路守宗秀、奥州白河郡岩瀬に移て、五代に小住以同憲秀の時、會津田島へ所替して、四代に住依、同秀光、至徳三年丙寅十二月上京して、紀伊守從五位下叙せり、嘉慶二年戊辰

三月足利義満將軍の命不背きて會津田島を沒收せし下野國都賀郡岩船山の麓白岩郷に來りて潛居し時小山泰朝同根の因を以て領地を分く同郡皆川庄を附與は是に於て秀光朽木郷に城を築く住し時應永元甲戌年あり其後皆川の城を再興して本城と爲同秀宗永享十年戊午八月朔日相州鎌倉小立越足利家の為生害に家臣山藤喜弥太荒川小弥太關保柏倉齋宮辛島登城所左馬助等共討死其男氏秀が時五十餘郷を領し皆川家中興の元祖あり其男宗成始く皆川宮内少輔と号し太永三年癸未土月三日宇都宮忠綱と同郡川原田に於て合戦して討死し今其所を合戦場と云其男成勝山城守と号し其男俊宗同山城守と号し天正元年癸酉九月十日相摸乃北条氏政下総國關宿に發向し築田中務大輔政豐を責り刻同根の因に依て結城晴朝等とも小加勢して田井に於て討死し家臣阿部城兵衛太郎川俣兵衛五郎氏家伊賀同源之丞須永刑部左衛門横倉伊豆厚木米倉田宮田中松本矢田中川野口大和田大貫高野立川玉田大森岡本平手柏倉風間森岡横地大佛等廿七騎と討死し同廣照宮内と云山城守に任じ宇都宮の旗下に屬して壬生上総公義雄の妹を嫁す天正

十二年甲午七月十六日北条氏直同郡藤岡小出張先陣松田尾張守憲秀秩父安房守氏邦大石近江守同四郎左衛門中條出羽守間宮備前守浅倉能登守行方彈正大谷帶刀等二万八千餘騎山口より太平山より攻來り社頭寺院残るを焼拂ふ小田原實記天正十三年四月とあり皆川中録によら皆川方より廣照の舎弟伊豆守俊勝壬生上総公義雄牛久大和守吉隆佐山信濃守政道河津石見守祐共關口但馬守盛行を始め幸島若狹杉江河内柏倉縫殿助中島藏人堤崎民部落合雅樂助毛塚大膳川俣集人須永監物齋藤右京植竹對馬寺内玄蕃日向野主計稻葉六郎左衛門野口新右衛門大橋新三郎増山九右衛門野原千五郎石川又六郎等其勢八千餘騎草倉山より出陣して防戦し七月十六日より同九月十五日まで六十日の合戦し小田原勢の討死士三十一人雜兵八十人許皆川勢の討死士十六人雜兵四十人許終り和睦して同十六日引退く云小田原實記六月廿日の長陣とあり天正十六年戊子十二月佐野左衛門佐氏忠と北条氏綱の二男同郡諏訪山に合戦し同く佐野の旗下栗野の城代平野大膳大橋左近等を討亡し其後終り小田原の旗下に屬し時天正十八年豊臣關白小田原征伐して發向あり廣照八百餘騎を引率して壬生上総公義雄成田下総守氏長

或木竹鼻
早竹浦
作ハ非也

寺とも北条陸奥守氏照の手小属し其勢二万五千餘騎あり竹鼻口
堅あり然るに三月廿九日山中の城落く明き四月朔日先陣宮木野を攻
入と聞えり夜廣照いひたふ忍び出く

徳川家の御陣所降参は是より依て本領三万石案堵せり然るに皆川の
城上杉中納言淺野彈正少弼松平修理大夫の三将三方より取圍ふ四月五
日より同一く八日攻む故城代關原馬河津石見河田因幡植竹對馬
同三河川島伊豆渡邊丹後をとりめ鈴木帶刀中島藏人大關助四郎浦野
新三郎稻葉六郎左衛門鯉沼助三郎大島内匠小倉大膳大和田小四郎大
木大學河邊弥七郎長石掃部丸山弥四郎長江右近土肥九郎三郎長
野主膳其外一人も残らば討死に室家共小子息隆庸を山田の白石
三河守義正方忍びて助たり應永元年より天正十年まで百九
十年より皆川の落城及び下り云

萬世家譜に皆川山城守廣照天正十年御旗本小属に慶長六年
上総父忠輝卿の御後見仰付られ四品に叙れ本知の外小信州飯山四万石を
加恩に同十四年忠輝卿の事付て御勅氣を蒙り元和九年
台徳公一名出され常陸國府中一万石拜領に云あり後故ありて半知

とれて今五千石なり越前の家士より皆川多左衛門と云人あり
皆川伊豆守俊勝が後孫に元和七年東福門院御入内の供奉と命せら
るて京都小住に近世聞えり皆川淇園名愿字伯恭
通称文藏則其末孫なりと云
系譜小云皆川山城守成勝の時永祿六年亡父宮内少輔宗成並小討死せり
家臣の菩提の為小領内川連村の阿弥陀堂小おいく常念佛を供養せ
むと云今之朽木馱の定願寺これなり則常念佛の料よりて九及九畝
二歩今寄附の田地あり當寺本尊弥陀如来傳教大師の作なりと
云天台宗の古道場なり

薬師寺城

河内郡薬師寺村にあり小山左衛門尉朝村より築く寛喜年中
なり

薬師寺系圖

下野國誌上

小山下野守朝政嫡孫

○朝村

藥師寺左衛門尉大夫判官

政氏

新左衛門尉

政村

阿波守左衛門尉

政盛

阿波守左衛門尉

貞光

次郎左衛門尉

公義

次郎左衛門尉入道元可歌人

公光

次郎

義春

勘解由左衛門尉觀應二年辛卯三月於駿州薩埵山討死

義夏

從五位下阿波守修理大進

助義

山城守正六位上掃部助

助光

掃部助

貞義

次郎左衛門尉

貞俊

阿波守

貞政

阿波守

貞氏

次郎左衛門

貞勝

阿波守

貞村

阿波守

勝朝

伊賀守實貞勝二男

東鑑子藥師寺左衛門尉朝村同新左衛門尉政氏寺往々（了）り、
太平記小藥師寺次郎左衛門尉公義同勘解由左衛門尉義春同

下野國記上

足利城

足利郡足利驛の西北の山上にあて、足利大夫成行を以て築て天喜年間なり

藤姓足利系圖

鎮守府將軍秀郷六代

○兼行 從五位下洲名大夫上野國洲名領主

成行

從五位下足利大夫

成綱

足利太郎早世

師任

沢脛四郎與余吾將軍平惟茂合戦而討死

行房

佐貫太郎上野國住人佐母貞治部大輔光景家督改名光繼

澤脛四郎と余吾將軍と戦ふ、今昔物語に見えり、さて、惟茂將軍の墳墓、今越後國蒲原郡小川通の山中、小あて、く尋ねぬ

家綱

足利八郎大夫左馬助又号安藤大夫、實成行二男

俊綱

從五位下足利太郎治承五年為家臣桐生六郎、生害

成俊

佐野庄司次郎元曆元甲辰十二月廿五日卒法名七室義觀号東明寺殿

郷綱

深栖三郎

成次

利根四郎

隆綱

山上五郎

足利式部大輔源義國之像



足利鍔阿寺安置

畫

足利將軍
源尊氏卿之像



同寺安置

風雅集

源尊氏

山風ハ三旗の松ノ木ノヤシキ
ゆづりのやそふふとす

下野國誌上

源姓足利系圖

鎮守府將軍源義家三男

○義國

正五位下式部大輔足利三郎母中宮亮藤原有綱女久壽二年乙亥六月廿六日卒新田足利兩家之祖久安六年庚午下野國足利云

本朝武家評林、天喜年中源義家朝臣、奥州征討の刻、當國に發向し、足利七郎有綱、ふや、り彼娘に配し、義國をまうけり、と記し、其、一、き誤なり、此系圖にあらず、如く、義國の母、中宮亮藤原有綱の娘あり、と、足利七郎有綱、義家朝臣より五代の後孫、頼朝卿に隨從せし事、東鑑より、い、は、義國より、も、遙、後の人なり、時代をも考合せ、有綱とあらず、と思ひ、混ひ、附會せり、なり、

義重

從五位下新田大炊助母上野女敦基女法名上西成淨西号大光院殿方山西公建仁二年壬戌正月十四日卒新田世良田山名里見等之祖

義康

從四位下足利陸奥守藏人判官代内昇殿母信濃守有房女保元二年丁丑五月廿九日卒三十一

義清

矢田判官從末曾義仲於備中水島討死仁木細川大崎等之祖

義房

足利判官從源三位頼政於宇治川討死

義兼

從四位下足利上總女母熱田大官司季範女實鎮西八郎為朝男正治元年己未三月八日卒号鑊阿寺殿

義氏

正四位下左馬頭陸奥守治部大輔母北条遠江守平時政女建長六年甲寅二月廿二日卒法名正義号法樂寺殿年六十六歌人

義頼

桃井次郎桃井之祖

尊卑分脈、足利義氏建曆和田合戰之時懸義秀被引切鎧袖乘逸馬超堀全身命云々
續拾遺、源義氏
源義氏

下野國誌十一

長氏

足利上總公吉良今川等之祖

泰氏

正五位下宮内大輔左馬頭母北条武藏守平泰時女文永七年庚午五月十日卒法名證阿号智光寺殿

家氏

從五位下尾張守大夫判官又太郎斯波之祖

賴氏

從五位下治部大輔初名利氏母北条修理亮平時氏女法名義仁号吉祥寺殿

義顯

三郎共川之祖

賴茂

四郎石堂佐々木等之祖

公深

律師一色之祖

家時

從五位下伊豫守式部大輔母上杉左衛門尉藤原重房女法名義忠号報恩寺殿

貞氏

贈從二位讚岐守母北条左近大夫平時茂女元弘元年辛未九月吾卒法名義觀号淨妙寺殿

尊氏

正二位權大納言征夷大將軍贈從一位大政大臣母上杉修理亮藤原賴重女從二位藤原清子延文三年戊戌四月廿九日薨五十四法名仁山妙義大相國号等持院殿

直義

從三位左兵衛督左馬頭母同上觀應三年壬辰二月廿六日依病薨法名故山惠源号大休寺殿

義詮

正三位權大納言征夷大將軍贈從一位左大臣母赤橋武藏守平久時女從二位平登子貞治六年癸卯十二月七日薨三十八法名瑞山道惟号寶篋院殿

基氏

從三位左兵衛督左馬頭母同上貞治六年癸卯四月廿九日薨廿八法名玉岩道所号瑞泉寺殿叔父直義為猶子後孫代々住鎌倉而称関東公方喜連川生實官原寺之祖

東鑑治承四年九月廿日己卯新田大炊助源義重入道法名西引龍上野國寺尾城聚軍兵云々

同五年足利三郎義兼北条殿息女云々建仁年中足利三郎義氏嘉禎年中足利五郎長氏同次郎兼氏其後足利太郎家氏大夫判官家氏ともあり同三郎利氏後改名頼氏寺往々小いそり建長六年十月廿二日庚午齋入道正四位下行左馬頭源朝臣義氏法名正義卒

今川記當時源氏ノ正統ヲ申奉ルニ義國ノ御子一男義重新田ノ初也

次男義康足利殿是先祖義康ノ御子一男矢田判官義清木曾殿ト同時ニ責上リ備中國水島合戦ニ討死也二男足利判官義房頼政ニ味シ宇治川合戦ニ討死シ給フ三男上総公義兼義康ノ家督ヲハ御相續ナリ

義兼ハ實ハ八郎為朝ノ子也シテ義康ノヒソカニ養ヒ給ヒケルト也御長九尺計ニテ力ハ勝レ給ヒ義兼此事知シサズニヤ頼朝ハヒソカニ知シ名給ヒケルト也頼朝ニキンシ給ヒ人カラモ穩便ニマシケレバ時政カ智ヲテ被申ケルト也然ハ頼朝ト義兼モ從弟ニテ又相智ナリ去程ニ新田殿ヨリ足利殿ノ御末繁昌レ代々北条家ト縁ヲ結ビ給シ也

義兼ノ實父為朝ハ高名ノ合戦ニ度人ヲ殺事數不知然共一人トシテ非義ノ敵ヲ不討古今無雙ノ強弓ニテアレドモ漁獵ノ遊ヲ不好慈悲ヲ先トシテ父母ニ孝アリ礼義ヲ專トシ一心ニ地藏ヲ奉念サル故ニヤ現在ニテ荒神ノヤウニ恐レシカトモ子孫ハ残リテ天下ノ武將トシテニ残リ給フ不思議ノ御事也

義兼ノ御子左馬頭義氏御法名正義北条義時ノ智也其御子一男足利五郎長氏上総公二男義繼三男泰氏宮内大輔平石殿ト申ス此御母義時ノ息女ノ腹ニテ左馬入道殿ノ家督ヲ相續シテ惣領ニ立給フ泰氏又取明寺殿ノ妹智耳ニテ式部大夫頼氏ヲ生給フ頼氏ノ御子家時伊豫守其御子貞氏讚岐守殿其御子尊氏將軍等持院様是ナリ其御弟直義大休寺殿今ノ鎌倉ノ初ナリ尊氏公ハ北条相摸守久時ノ智ナリ寶篋院ノ御母是也加様ニ代々先代ノ御縁邊ニテノ御威勢源家ノ棟梁ニテマシケルトカヤと記

難太平記足利義兼ハ為朝島ニテマケタル子ニテ密ニ足利義清ヤシナヒテ子トス狂人ト偽リテ頼朝ニ對面セス一生安坐スともありされど義清の

安藝郡佐野庄枋本村の唐沢山の上より鎮守府將軍秀郷朝臣の築く所と云同鎮守府將軍賴行より六代より中絶せしを其後孫佐野庄司成俊再興して居住しそより佐野太郎基綱相續して子孫代々是に住せり

佐野系圖

鎮守府將軍秀郷九代

○家

綱

足利散位左馬助又号安藝八郎大夫

有

綱

足利七郎領都賀郡部屋郷号部屋子七郎戸矢子

基

綱

佐野太郎改名忠家一本作從五位下佐渡守伯父佐野庄司成俊為智依住空沢山城号安藏寺

為

綱

次郎

為景

次郎入道浄阿

雅

綱

三郎

晴

綱

三郎入道全阿

廣

綱

阿曾治民部丞四郎別在系

信

綱

木村五郎

政

綱

次郎左衛門尉

女

子

小野寺中務丞通綱室

日光中禪寺鐘銘建保四年丙子三月廿二日願主左衛門尉藤原政綱とあり

茂

綱

角折七郎

國

綱

吉水太郎佐野庄吉水郷住居仍号吉水母成俊女

實

綱

左衛門尉實治元年丁未六月五日鎌倉法華堂合戦討死

吉水村興聖寺國綱の母妙水尼の建立云尼公建保四丙子六月十八日寂と同寺記録より

成

綱

小太郎與父實綱共討死号松中院

景

綱

上佐野次郎

時

綱

関口三郎上野國関口住人

廿九

宗

綱

戸奈良五郎與父兄共討死号超願寺

行

綱

鹿沼六郎右衛門尉

勝

綱

鹿沼權三郎入道教阿鹿沼神山

親

綱

閑馬七郎

日光山新宮の廣前小銅燈籠一基あり其銘正應五年壬辰三月日願主鹿沼權三郎入道教阿と彫付あり

清

綱

八郎依父兄討死家督相續

東鑑よ治承五年辛丑閏二月廿三日志田先生三郎義廣謀及の刺是利七郎有綱嫡男佐野太郎基綱四男阿曾沼四郎廣綱五男木村五郎信綱及太田權頭行朝寺合陣于小手差原小堤処合戦此外八田武者所知家宇都宮所信房小栗十郎重成鎌田七郎為成湊河庄司太郎景澄等加山朝政蒲冠者範頼馳来也云、

同六年の条よ佐野太郎忠家とありも佐野太郎基綱が事をり、承久三年辛巳六月後鳥羽上皇隱謀の刺佐野太郎同次郎入道同三郎入道等攻登りて錦織判官を生虜あり云、

北条九代記よ佐野小次郎同七郎太郎同八郎と記あり、寶治元年丁未六月五日三浦若狭前司泰村謀及露顯の刺佐野左衛門尉同子息太郎同小五郎佐貫次郎兵衛尉等一味同心あり依り法華堂小於て合戦生害云とあり、

建長三年正月廿日出仕の中よ佐野八郎清綱とあり、太平記よ元弘の始後醍醐天皇隱謀を企て給ふ時東國より攻登り小山結城長沼寒河宇都宮氏家那須等の中よ佐野安房弥太郎木村次郎左衛門尉等とあり、其後觀應二年十二月駿州薩埴山の合戦よ宇都宮公綱後詰とて發向り刺佐野佐貫の一族等馳加り云とあり、

直

綱

左衛門尉小太郎号
法光院

資

綱

從五位下安房守弥太郎号
新福院

師

綱

從五位下越前守弥太郎

重

綱

從五位下左馬助小太郎法名
俊海延徳元己酉七月廿五日卒
密藏院功山忠正

下野國誌上

季

綱

左近將監小太郎法号

盛

綱

越前守小太郎大永七丁亥二月五日卒空法名本光寺明鑑道昌

重

長

岩崎次郎左馬助大永二壬午八月十五日卒法名見照院一桂明鑑

秀

綱

越前守小太郎天文十五年丙午八月十三日卒七十五法名松根院一器道公

是

綱

小見次郎左衛門尉

增

綱

船越六郎

親

綱

戶室七郎

重

綱

田沼九郎

泰

綱

修理亮小太郎永祿三年庚申正月廿九日卒七十三法名東根院一溪唯善

行

綱

柴官六郎

利

綱

久賀七郎兵衛一本作光綱元龜三年壬申五月三日與壬生上總及義雄合戰而討死久賀南摩等之祖

高

綱

中江川九郎左衛門

豊

綱

隼人佐小太郎永祿二年己未九月廿五日卒五十六法名興聖寺大通長賢

女

子

関口佐渡守吉久室号富子

女

子

小曾戸撰津守行家室号由良子

昌

女子

綱

子

越前守周防守小太郎天正三年甲戌四月八日卒六十六法名佛生院天山道一

茂呂左馬助利資室号倉子

宗

綱

修理亮小太郎天正十年癸未正月元日為長尾但馬守顯長於同郡彦間數葉那坂討死于時共同二月五日自是利送逆首級同日葬於本郷大明山本光寺法名水晶院璜山長渭

房

綱

小次郎出家号天德寺了伯天正三年乙亥二月剃髮同八月上京仕于豐臣家同十年歸國還俗号佐野修理大夫政綱文祿二年癸巳二月以富田左近將監知信二男信種為養子令佐野家督同三月如元剃髮再号天德寺了伯慶長二年丁酉二月隱居同郡赤見郷同三年戊戌二月移往都賀郡仙波郷阿土山同六年辛丑七月二日葬四墓山形郷報恩寺号天德寺萬久了伯

重

綱

又次郎上野國桐生大炊助直綱家督

光

綱

吉五郎出家号幽願寺了性天正十七年己丑三月八日於越後國高田生害于時三十歲

虎松丸

上杉輝虎入道謙信猶子天正七年己卯二月廿四病死十四歲

信吉

修理大夫從五位下實富田左近將監源知信二男初名松四郎信種文祿二年癸巳二月廿五日佐野家督于時六歲慶長元年丙申正月後豐臣秀吉公賜諱一字改信吉同七年壬寅十二月奉旨辛沢山城移天明郷春日岡同十九年甲寅七月廿六日有故改易信州松本小笠原家御預寛永十一年甲戌六月可召出之旨蒙台命出府之刻於道中煩卒中風同七月十五日卒去于時五十九歲法名号正蓮院功山源忠

女子

信吉室元和六庚申二月廿四日逝法名号明窓貞珠大姊

中興武家勲功記、富田左近將監清和源氏伊勢國阿濃津城主五万石長男信濃守信高伊豫國宇和島城主と成り十万石後故有く改易七千石二男信吉佐野家督九万石後加増有て十万石を領し慶長十九年大久保石見守長安が隠謀露顯の刻縁坐て依て

下野國誌上

改易とあり、

久綱

吉兵衛尉初吉之允延寶七年己未六月廿五日本法名義光院雲峯性忠

勝綱

助右衛門尉初喜兵衛多名喜三郎

勝由

信濃守從五位下初彦九郎知行二百石

茂祇

三九衛門初助十郎知行三百石

正行

修理大夫從五位下初吉之允知行三千五百石

宗長東路襄小永正六年文月云、中畧佐野の館五日許あり、會
あり、小音九連歌器量なるあり、宿のたうと、山上筑前守興行、

其夜野分しての朝ちるべし、佐野越後守見糸一してそち、

事どもなり、此所は佐野田の稻あり、萬葉よもよめて船橋

も此ありありあり、云々、越後守とあり、越前守

盛綱の事ちるべし、山上筑前守とあり、佐野の一族山上五郎隆綱

が後孫とて、天正の頃、山上内膳輝秀と聞えし、此筑前守の孫か

るべし、内膳、剃髪して道笠と号し、天徳寺了伯小隨後せし忠臣なり、

東國擾乱記、天正十年佐野修理亮宗綱、同國足利の長尾但馬守

顯長が為し、同郡彦間の城を襲ひ取らし、云々、同十年正月元日宗綱

彦間を馳向て討死し、云々、是に依り、佐野家断絶し、及ぶなき所を、

老臣大貫越中武重が計し、云々、相摸の北条氏政の舎弟九衛門佐

氏忠をひらひ、佐野の家名茂相續し、云々、

同十二年甲申七月北条氏直太平山小攻寄て、皆川山城守廣照と六十

日の間對陣し、佐野九衛門佐氏忠其隙を窺ひ、皆川の旗下齋藤左

衛門秀隆が守り、粟野の城を責取て、平野大膳、岩出右京松崎

雅樂助大橋左近横尾兵庫、神山新左衛門等守り、云々、

同十六年戊子十二月皆川より齋藤左衛門秀隆を大将として杉江
 河内、弦卷、伊勢、玉田圖書、北岡藏人、河田因幡水谷玄蕃、金子長門、箱
 島左近、鯉沼助三郎、稻葉六郎左衛門、長江右近等二千餘騎を攻め、
 佐野方より、寺内信濃生沢伊豆を大将として、清水右京、葛生縫殿、
 膝附攝津田中源十郎、羽生彦十郎、神山修理須賀大和吉沢四郎右衛門、
 古橋監物、山井兵庫、片柳十大夫、鶴見五郎兵衛、築池猪熊三木、玉井、
 内田大野、関塚黒川等馳合て防戦し、平野大膳、大橋左近、松崎、
 雅樂助、清水右京、葛生縫殿、古橋山井、膝付を、三十七人討死し、
 皆川方も齋藤左衛門、植竹左馬助、高田兵部等十三人討死し、陣と
 も雑兵の討死も、計を多し、平野大膳、娘一人有る、今年
 十七歳あり、其うち一人は勝れ、嚴し、平野も深く、
 大膳并ふ左近等、栗野に於て討死し、と聞て、彼所に至り、
 日そあり、つり、思ひも、あ、あ、の言と、清く、
 と一首の歌を詠、左近討死し、所より、自害して、同一枕、
 あり、

同十八年庚寅三月、豊臣殿下北條征伐として、相州小田原より、駿河の、刺佐
 野宗綱の舎弟天徳寺了伯都小在り、東國の案内者より、召具せら
 れ、佐野の城へ遣はされ、老臣岩崎吉十郎久長、阿曾治助大夫方重、
 長島玄蕃行國、戸室伊賀行宗等、天徳寺に歸伏し、然るを大貫越中
 一人氏忠は、後く是を拒み、山崎阿曾治等、大貫を討亡し、天徳寺
 を主君と仰ぎ、小田原没落の後、殿下の御家人、富田左近將監、知
 信の二男、信種を養子として、佐野修理大夫と名の、宅家替を譲り、天
 徳寺了伯、同郡赤見郷に隠居し、と、佐野軍記に、大貫
 越中謀反を企て、宗綱の奥方并息女を追出して、氏忠を主人と、
 新田老談記、館林盛衰記等、異同あり、考合、
 北條分限帳に、御新造知行之内、下野國佐野領、而被遣千貫文とあり、
 東遊行囊抄卷廿、佐野城自大、一里、舊壘、自是西、本村、上、アリ、
 近世、佐野修理大夫、居城、佐野分限、其頃、八、方、石、有、故、御、改、
 易、其、時、毀、之、と、記、
 夏目氏の記、關東の七箇城と云事を載せり、下野唐沢山城、
 同、宇都宮城、上野新田山城、同、厩橋城、武州川越城、同、忍城、常陸太田

城と記しあり、
 猿樂の謡曲は鉢木と云物小佐野源左衛門常世と云者最明寺時
 頼入道殿は雪の夜とあるをせよあはせく幸ひはあひし事と書し
 て是はももよりあらわな名をすけりけり作りのありしはあはせく
 なるまはあはれど此謡曲より始まるる浄瑠璃物語を彼是作り
 出ししれはさるるもありんと思ふ人多らざれどいふも北條九
 代記小最明寺入道殿津國の難波の老母が家よりよりて其由緒を聞
 て後は彼難波の家を取立られし事見えたるをよびて佐野の事よと
 して作して作してありしといふはよりの

阿曾沼城

安藤郡佐野庄浅沼村小あや阿曾沼四郎廣綱とめく築く壽永年
 中たふ

阿曾沼系圖

足利七郎有綱男
 ○廣綱 阿曾沼民部丞四郎 朝綱 太郎

親綱 次郎實廣綱二男 光綱 民部丞次郎

次綱 郎 公綱 四郎

郷綱 四郎太郎 氏綱 弥太郎

貞綱 弥大夫 晴綱 四郎大夫

下野國誌上

元 綱

民部

方 綱

弥四郎

方 重

助大夫

廣綱親綱光綱綱綱氏綱貞綱等武家大系圖十四卷系圖等小もまゝに
異同あり

東鑑に阿曾治四郎廣綱も淺沼四郎廣綱も書り元來、安藤治
ちくひ訛アて淺沼と呼びたり舎兄佐野太郎基綱も小壽永
二年武藏の小手差原合戦に出陣も〜建曆年中阿曾治
次郎親綱も嘉禎年中阿曾治小次郎光綱も民部光綱も〜次
同四郎次綱も〜
北條九代記に承久三年都下攻登る中、阿曾治小次郎近綱と〜親
綱あり
佐野軍記に天正年中阿曾治助大夫方重、阿曾治民部丞廣綱十三代の
嫡孫なりと記しあり

大系圖、高階惟長、義利庄司依義兼申、達百右大将奥州信夫庄給之あり

東國擾乱記に阿曾治助大夫は佐野家の二門家老として修理亮宗綱の補佐あり昌綱侍女子通して懐妊〜を助大夫密に我子となして養育し女子あり〜後、是利郡佐川田の住人佐川田喜六昌俊に嫁し昌俊は方重が母方の甥として其先、高階惟長の末葉を了代々佐野に後い〜後永井右近大夫直勝め〜勤仕し其後致仕して遁世し山城國新里に庵を結び〜黙々庵と号し世に聞え〜る歌人として寛永廿年癸未八月三日没六十五歳と聞えり寛文の大后宮の撰ばせ給ふ集外三十六歌仙の一人として
〜の花より〜の〜
此歌一代の秀逸として世の人乃知る所なり昌俊の傳に〜を事
〜の〜

小野寺城

都賀郡小野寺村小あや、小野寺禪師入道義寛より〜築く保
元元年丙子なり

下野國誌上

小野寺系圖

鎮守府將軍秀郷代

○文行

從五位下左衛門佐後孫
号佐藤母利仁將軍女

公光

從五位下相摸守母右兵衛佐定
文女

公清

佐藤左衛門尉母同姓阿波守兼光女佐藤近藤武藤尾藤首藤山内等
之祖

經範

右馬助波多野河村松田廣沢等之祖

助清

主馬首故後孫号首藤
三河國住人

助通

首藤權頭從源賴義而七騎
之一人武名高

親清

首藤太左衛門尉

義通

山内首藤刑部丞相摸國住人

通清

鎌田權頭

正清

鎌田兵衛尉平治二年庚辰正
月言從源義朝至尾張國野
間守津美為舅長四忠宗主
從討死

定義

瀧口右馬允

俊通

瀧口刑部丞平治元己卯三
月廿七日合戰討死

俊綱

瀧口郎與父共討死山内首藤
瀧口五味寺之祖

義寬

小野寺禪師入道從六条判官為義數度有武功故賜諱一字始被補下野
國小野寺莊領主職建仁三年癸亥四月八日卒法名号夜叉院七寶義寬

通綱

小野寺中務丞号禪師太郎治承四年庚子五月廿三日高倉官隱謀之時
與是利又太郎忠綱守治川先陣其後屬源賴朝承久三年辛巳五月後鳥
羽上皇隱謀之時依二位尼公之命從北条泰時之手同六月十四日於守治
川討死于時六十八歲法名号住持寺弘國通綱

秀綱

左衛門尉承久三年與兄通
綱上京從是利義氏之手有武
功云

秀通

太郎伯父通綱為猶子

通業

小次郎左衛門尉母是利七郎有綱女

通時

四郎左衛門尉

行通

新左衛門尉

泰通

左衛門尉

通義

中務丞

東鑑小治承五年閏二月小野寺太郎通綱武藏國小手差原合戦小
小山政朝の陣に馳加ひ志田先生義廣と戦ふゆ元暦元年の
条に蒲冠者範頼に属して平家を攻るゆ承久三年の条に
小野寺入道と討取内入手討とありて討死の人数の中小野寺中務丞と
あり

平家物語に小野寺禪師太郎是利又太郎忠綱と共に宇治川を渡りて
源三位入道の陣を破るゆゆ源平盛衰記にも同く記しあり
また東鑑に建仁年中小野寺太郎秀通あり嘉禎年中小野寺四
郎左衛門尉通時同新左衛門尉行通あり小野寺小次郎左衛門

尉通業等もいへりさて後孫は應永の頃より出羽國仙北城に移
住して數代彼所小在しが天正の頃小野寺下野守綱元と聞えり人
豊臣家小属して三万石を領し関ヶ原合戦の刻直江山城がまめ小依り
石田三成小與力六郷と數度戦て勝利を得るといへり上方まで
敗れと聞て城を開き會津小至るゆ美濃國瑞龍寺の城主小野寺
弥七郎通元中江式部少輔景継時田權之助時喜等と共に伊勢國阿濃
津の富田を攻落して彼城小入替てなすが関ヶ原既小敗れと聞て逐電
して中興武家盛衰記に記しあり

幻夢物語と云りゆ下野國の住人小野寺右兵衛尉親任と云者有る
上野國の大胡左近將監家詮と争論して家詮を討つ家詮の男花松丸
と云少人日光山の竹林坊に在りしが密に小野寺が館に忍入て親任を討
て父の仇を報ひ親任が男小野寺小太郎親次と云者追ひ付く花松丸を
討つゆが無常を觀して發心して父の菩提をなすなり花松父子の跡を
し懇ふしを記しありさて今日光山は竹林坊と云ふあり日光
山坊舎建立記に竹林坊ありや比叡山の竹林坊を移ししが坊ありが
今い廢しあり西谷まで今の奉行屋鋪の邊あり

天正十八年小田原の旗下に小野寺善九郎貞綱あり、宇都宮の家臣よ小野寺小左衛門、小山の家臣よ小野寺勝平あり、元禄年中、淺野内匠頭殿の鯉と報し、義士の中よ小野寺重内秀和、同息幸右衛門秀富あり、今佐竹の家士よ小野寺權之助と云人あり、會津の家士よ小野寺數馬あり、植村土佐守殿の家士よ小野寺半右衛門あり、田安御殿の附衆よ小野寺市郎兵衛と云人あり、是寺も、其末葉あり、當國粟宮の神主、小野寺氏よ、其所藏よ古河公方政氏朝臣の下知状ありて、文龜三年三月十三日小野寺宮内左衛門尉殿と記し、安房國銚山羅漢寺の洪鐘銘よ下野州佐野莊堀米郷瑞龍山天應禪寺住持沙門大朴玄淳大檀那中務丞藤原通義永徳二年十月廿五日と彫付し、是、小野寺家の祈願所よ寄置を物あり、兵乱の刻彼所よ持行し、ものあり、

下野國誌十一之卷終

足利 梅溪田崎明義畫
北越 竹邨遠藤順信書

